

# 男女別学高校から共学高校への移行と生徒の意識

—— 群馬県立桐生高校卒業生へのインタビューから ——

坂本 祐子・小林 陽子・斎藤 周

## **High School Students' Awareness about the Transition from Single-Sex Education to Coeducation**

Yuko SAKAMOTO, Yoko KOBAYASHI and Madoka SAITO



# 男女別学高校から共学高校への移行と生徒の意識

—— 群馬県立桐生高校卒業生へのインタビューから ——

坂本 祐子<sup>1)</sup>・小林 陽子<sup>2)</sup>・斎藤 周<sup>3)</sup>

1) 群馬パース大学

2) 女子栄養大学

3) 群馬大学共同教育学部社会科教育講座

(2023年9月27日受理)

## High School Students' Awareness about the Transition from Single-Sex Education to Coeducation

Yuko SAKAMOTO<sup>1)</sup>, Yoko KOBAYASHI<sup>2)</sup> and Madoka SAITO<sup>3)</sup>

1) Gunma Paz University

2) Kagawa Nutrition University

3) Department of Social Studies Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 27th, 2023)

### はじめに

現在の日本で、入学資格を女または男に限定している別学公立校は数少ないが、後述のように群馬県、栃木県、埼玉県、鹿児島県には多く存在する。なかでも群馬県は、別学校の割合が19.4%と最も高い(2023年度の募集定員による)。小山静子は「群馬県は現代にあっても男女別学に対する志向性が強固に存在する県であり、男女別学が人々に受け入れられているといえるだろう」と論じている<sup>1)</sup>。

群馬県では、1990年代に共学化の動きが現れた。1995年に、群馬県後期中等教育審議委員会(会長上寺久雄聖徳学園岐阜教育大学学長)が「新しい時代に対応する本県高等学校教育の改革について」と題する報告を県教育長に提出し、その中で「今後、本県においては、将来的にすべての公立高校を例外なく男女共学とする方向で改革を進めることが適当である」と述べられている<sup>2)</sup>。とはいえ、その後の歩みは遅々としたものに留まっている。人口減に伴

う高校統合とともに、緩やかに共学化が実施されてきているのが実状である。比較的最近の例では、「高校教育改革推進計画」(2011年)の中で3件の統合・共学化の方針が打ち出され、うち2件は2018年度に、1件は2021年度に行われた。

本研究では、全国的にも数少ない公立高校の男女別学校が共学化した際に、生徒たちが経験したことや当時の思い等を分析・検討することをとおして、共学後の課題等について示唆を得ることを目的とする。具体的には、2021年度に開校した群馬県立桐生高校(共学校)を対象とする。同校は、群馬県立桐生高校(普通科は男子のみ、理数科は共学)と群馬県立桐生女子高校の統合により開校した。

はじめに、全国と群馬県における公立高校の別学の現状を確認する。次に、統合・共学化を控えた桐生高校・桐生女子高校に2019~20年度に入学した者(現大学生)を対象に聞き取り調査を行った結果から、公立高校の男女別学校が共学化した際に、生徒たちが経験したこと等を分析・検討する。

## I 全国と群馬県における公立高校の男女別学の現状

### 1 全国の公立高校の男女別学の現状

#### (1) 制度としての別学校

現在の日本で、公立の別学高校（入学資格を女または男に限定している学校）は数少なくなっている。公立の全日制別学高校数を都道府県別にみると、別学校があるのは47都道府県中の8県にとどまり、校数は43校（女子校26校、男子校17校）である（表1）。地方別にみると、東北地方1校、関東地方34校、中国地方1校、九州地方7校となり、北海道・中部地方・近畿地方・四国地方には存在しない。県別にみると、群馬県、栃木県、埼玉県、鹿児島県に多く存在する。

このうちの群馬県、栃木県、埼玉県では、それぞれ緩やかに別学校数を減少させてきて、現在の数値になっている。これら3県の共通点として、県立の別学校が県内各地域を代表する進学校だということがあげられる。一方で、宮城県、福島県にも県立の別学校が多数あり、やはり地域の代表的進学校だったが、それらはすべて共学化されている（宮城県には現在も1校の女子校があるが市立校である）。

福島県では、1993年の県学校教育審議会答申「生

徒減少期における高等学校教育の在り方について」を受けて共学化が進められ、2003年度までに全20校の別学校が共学になった。また、宮城県では、1999年に県教委が共学化を含む「県立高校将来構想素案」を策定し、2000年に県立高校将来構想有識者会議は全校共学化の方針を示した。これを受けて県教委は統合を含む共学化を決定し、2010年度までに全校を共学化した（男子校・女子校の統合による共学校が5校、男子校の共学化が6校、女子校の共学化が5校）。

また、秋田県には、県立の女子校が7校あったが、2007年から2016年にかけてすべて共学校になった（3校は単独で共学化、4校は他校との統合により共学化）。

なお、表1は2023年度の募集を基準としたデータだが、その先の変化が見込まれる。具体的には、2024年度の新入生募集に関わっては、鹿児島商業高校（市立の男子校）が共学化すること<sup>3</sup>、三井中央高校（福岡県の一部事務組合立の女子校）が募集を停止し2026年3月で閉校すること<sup>4</sup>が決まっている。さらに、鹿児島県立楠隼中学・高校（男子校）について、2026年度から共学化する方針を県知事が表明している<sup>5</sup>。これにより、九州地方では、公立の別学高校が現在の7校から4校に減り、男子校

表1 全国の全日制別学公立高校数（県別、2023年度）

都道府県	女子校数	男子校数	別学校計	共学校数	公立高総数	別学校率
宮城県	1(1)	0	1(1)	67(3)	68(4)	1.5%
群馬県	6	6	12	50(5)	62(5)	19.4%
栃木県	4	4	8	50	58	13.8%
埼玉県	7	5	12	125(5)	137(5)	8.8%
千葉県	2	0	2	123(7)	125(7)	1.6%
島根県	1(1)	0	1(1)	34	35(1)	2.9%
福岡県	2(2)	0	2(2)	97(7)	99(9)	2.0%
鹿児島県	3(2)	2(1)	5(3)	63(4)	68(7)	7.4%
8県計	29(7)	18(1)	47(8)	609(31)	652(38)	7.2%

\*（ ）内は、市立または一部事務組合立の別学校数で内数。

\*上記の8県以外の都道府県には、公立の別学高校はない。

はなくなる見通しとなっている。これら3校に共通するのは定員割れという状況である。

## (2) 在学生在男のみ/女のみ/の学校

制度としての別学校の校数に関する全国的な公的統計はないが、文部科学省の「学校基本調査」は、男のみ/女のみが在学している公立校の校数を示している(表2)。このデータは在学生在が基準となっているので、性別により入学を制限していないものの男のみ/女のみが在学している学校(制度としての共学校だが実状は別学校)、募集を停止して2~3年生または3年生のみが在学している学校、別学から共学に変ったばかりで2~3年生または3年生が入学した時点では男のみ/女のみに入学者が制限されていた学校が含まれている可能性がある。また、一つの学校の全日制と定時制を分けて数えていないので、全日制は別学だが定時制は共学で男女生徒が在学している場合は「男女ともにいる学校」に含まれている。

実際に、現時点では男のみ/女のみが在学という公立高校の存在が確認できる。山形県立高校の2022年度のデータ(「山形県学校名鑑」<sup>6)</sup>)をみると、山形南高校は男子のみ在学、山形西高校は女子のみ在学となっている。山形北高校では男子生徒が5人在学しているものの全員が音楽科(山形県立高校では同校のみにある学科。男女計55人が在学)であり、普通科480人はすべて女子という事実上の女子校に近い状況にある。また、岩手県立盛岡第二高校、茨

城県立水戸第二高校、茨城県立日立第二高校も、2023年度の時点で女子のみが在学している<sup>7)</sup>。

他方で、能動的な取り組みにより事実上の別学校から脱した例もある。熊本県立第一高校は、事実上の女子校だった状況から男子生徒を増やし、現在では共学校として定着している。戦前の高等女学校を前身として戦後に共学の新制高校となった同校だが、1978年に男子生徒がゼロとなった。2011年に同校の同窓会が男女共学推進委員会を立ち上げ、男子の入学者が出るよう取り組みを進めた。こうして2012年には70人の男子が入学し、2016年度には在学中の男子生徒の比率は約4割になっている<sup>8)</sup>。

茨城県立水戸第三高校も、男子生徒を増やすための取り組みをしている学校である。同校のウェブサイト<sup>9)</sup>の学校沿革をみると、2007、2008、2009年に普通科に男子生徒がそれぞれ12名、21名、18名が入学したことが記されていて、それ以外の年は男子入学生がわずかだったことが窺われる。最近では、2023年度の入試に向けて「来たれ!男子生徒!」と題するリーフレットを作成し、その中で男子の受入体制を整えていることを示すなど、新たな取り組みを開始している。2023年度の入学生をみると、296人中で男子は12人(普通科11人、家政科2人、音楽科3人)になった。2023年度の男子在校生(1年生以外)は2年生5人、3年生1人であるので、取り組みの成果と推測される。

表2 在学生在「男のみの学校」と「女のみの学校」(2022年5月1日現在)

	計	国立	公立計	公立本校	公立分校	私立計	私立本校	私立分校
計	4,824	15	3,489	3,409	80	1,320	1,318	2
男女ともにいる学校	4,432	13	3,434	3,360	74	985	983	2
男のみの学校	100	1	17	14	3	82	82	0
女のみの学校	275	1	30	29	1	244	244	0
生徒のいない学校	17	0	8	6	2	9	9	0

\*出典は、文部科学省「学校基本調査」(2022年)。元の表の一部を省略した。

\*「この表は、男子校あるいは女子校という分類ではなく、現実に在学している生徒の状況により分類して集計した」と説明が付けられている。

## 2 群馬県の共学／別学状況の推移

群馬県では、1948年の新制高校の発足にあたり、旧制中学校（男子校）と高等女学校からの転換により、数多くの公立男子校・女子校（制度としての別学校）が開設された<sup>10</sup>。共学化の動きが現れるのは、1990年代に入ってからである。

1993年度から2021年度にかけて、15校の公立別学高（女子校11校、男子校4校）が共学化した。このうち、女子校が単独で共学化した事例が5件、女子校と男子校が統合して共学校となった事例が3件、女子校と共学校が統合して共学校となった事例が2件、男子校が一部共学化して後に女子校と統合・共学化した事例が1件（本研究の対象とする桐生高校）である。今後については、女子校と男子校の統合・共学化1件（2025年度）が決まっている。

### (1) 市立女子校の共学化

群馬県には、市立の高等女学校が4校あった。新制高校発足の際に、このうちの1校は共学化した。他の3校は女子校となった。この3校が、1990年代にそれぞれ共学校に変わった。

伊勢崎市立女子高校は、1993年度の募集から共学化し、校名は伊勢崎市立伊勢崎高校になった。なお、同校は、2009年の伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校開設に伴って2012年度から募集を停止し、2014年に廃止された。

前橋市立女子高校は、1994年度から一部共学化し、前橋市立前橋高校に名称を変更した。1993年度入学生は9クラス（普通科7クラス、家政科2クラス）だったのを、1994年度募集では8クラス（すべて普通科）とし、うち1クラス（理工コースA）を共学とした。その後、1997年度募集（普通科6クラス編成）から、全面的に共学となった。

高崎市立女子高校は、1994年度に共学の高崎経済大学附属高校（高崎経済大学は高崎市立の大学）の新設に伴って募集を停止し、廃止された。在校生は高崎経済大学附属高校に転学した。

### (2) 県立高校の統合と共学化

県立高校においては、1990年代には共学化の動きはほとんどみられなかった。唯一の例外は桐生高校の一部共学化である。すべて普通科の男子校だった桐生高校は、1998年度に共学の理数科を新設し、学年のクラス編成は男子のみの普通科5クラスと共学の理数科2クラスになった。

県の教育委員会の方針として共学化が示されるようになるのは、2002年の「教育改革基本方針」からである。そこでは男子校と女子校の統合による共学化2件と女子校単独での共学化2件が示され、2005年度に実現した。

2005年には、県教育委員会から「県立高校の再編整備（中期）及び入学者選抜について」と題する文書が発表された。そこでは統合共学化2件が示され、うち1件は2007年度に実現したが、もう1件は頓挫した。頓挫したのは沼田高校（男子校）と沼田女子高校とを2009年度に統合・共学化する計画であり、同窓会など地元の反対にあい、県教委は2008年に方針を見直した<sup>11</sup>。

2011年には、県教育委員会が「高校教育改革推進計画」を策定し、その中で県立高校再編整備の方向が示された。これを受けて、3件の統合・共学化が具体化され、2件は2018年度に、1件は2021年度に行われた（これは、一部共学化していた桐生高校と桐生女子高校との統合である）。その後、少子化が進む中で、2021年に沼田高校と沼田女子高校との統合（2025年度）が決定した。当初の計画から16年遅れての共学化となる。なお、これら4件の統合では、統合時の在學生は統合後の新高校に転学し、新高校を卒業する。これ以前に統合・共学化が行われた学校では、統合時の在學生は入学した学校（統合前の学校）に卒業まで在籍し続け、それらの生徒が卒業した段階で閉校となった。

以上の県立高校共学化の概要を表3に、2025年度の沼田高校・沼田女子高校の統合・共学化後に残る別学の県立高を表4に示す。

表3 群馬県立高校の共学化（1998年度以降）

	共学化／統合の前		共学化／統合の後		備 考
	校名	共学／別学	実施年度	校名	
単独で共学化	桐生	男子校	1998	桐生	新設の理数科のみを共学化した。
	伊勢崎女子	女子校	2005	伊勢崎清明	
	太田西女子	女子校	2005	太田フレックス	太田フレックスは定時制（昼・夜）。
統合・共学化	伊勢崎東	男子校	2005	伊勢崎	
	境	女子校			
	藤岡	男子校	2005	藤岡中央	
	藤岡女子	女子校			
	前橋商業	共学校	2007	前橋商業	
	前橋東商業	女子校			
	中之条	共学校	2018	吾妻中央	両校とも、別学校だった時期と共学校だった時期がある。
	吾妻	女子校			
	富岡	男子校	2018	富岡	旧富岡高は共学校だった時期がある。
	富岡東	女子校			
	桐生	共学校	2021	桐生	旧桐生高は男子校だった時期が長い。
	桐生女子	女子校			
沼田	男子校	2025	沼田		
沼田女子	女子校				

表4 別学の群馬県立高校（2025年度以降）

男子校	前橋高校、高崎高校、太田高校、館林高校、渋川高校
女子校	前橋女子高校、高崎女子高校、太田女子高校、館林女子高校、渋川女子高校

### (3) 桐生高校の共学化

ここで、本研究の対象とする桐生高校について、あらためて共学化の概要を示しておきたい。

1948年の新制高校発足に際して、旧制中学校を前身とする桐生高校（男子校）と高等女学校を前身とする桐生女子高校が発足した。その後の両校は、50年にわたって別学高であり続けた。前述のように、桐生高校は1998年度に共学の理数科を設置し、一部共学の学校となった。一方で、桐生女子高校は女子校として存続した。桐生女子高校は、1989年度

から英語科を設置していたが、2018年度に英語科の募集を停止し、普通科のみとなった。

2011年の「高校教育改革推進計画」を受けて、県教育委員会は2016年に「桐生・みどり地区県立高等学校再編整備計画」を策定し、その中で「桐生高校、桐生女子高校を統合し、高いレベルの進学を目指す新高校を設置する」こと、2021年度に桐生高校校地に開校することを示した。続いて2017年には「桐生高校・桐生女子高校の統合による新高校の概要」を発表し、そこでは普通科6クラス・理数

科2クラスの計8クラス編成とすることが明記された。2019年には、新高校の校名を桐生高校とすることを県教育委員会が決定・発表した。このような過程を経て、2021年度に桐生高校と桐生女子高校が統合し、新しい共学の桐生高校が開設された。8クラス編成は、統合前の両校の合計クラス数（桐生高校が普通科4クラスと理数科2クラス、桐生女子高校が普通科4クラス、計10クラス）から2クラス減の規模である。

統合に際しては、在學生は新しい桐生高校に転学し、新しい桐生高校を卒業することになった。ただし、新高校になってから入学した生徒は各クラスも共学となったが、新高校開設時の普通科2～3年生は男女別のクラスだった（選択科目では男女生徒がともに学ぶこともあった）。

## II 研究（調査と分析）の方法

### 1 調査協力者（聞き取り対象者）

群馬県立桐生高校または群馬県立桐生女子高校に2019年度、2020年度に入学した者（現大学生）に調査協力を依頼した。2019年度入學生は高校3年次で統合を、2020年度入學生は高校2年次で統合を経験した。調査への協力依頼方法は、以下の通りであった。①調査者が担当している授業の受講生等に個別に依頼した。②調査協力者に同級生を紹介するよう依頼した。③調査者が授業内に募集しそれに

応募した学生に依頼した。以上の方法によって、合計7名の学生を調査協力者とした。

### 2 調査方法

Zoomを使用したオンライン形式で面接による聞き取り調査を実施した。面接期間は2023年4月から7月であった。事前に質問項目を記した電子メールを送り、質問項目の内容にそって、一人当たり30～45分の電子面接法による半構造化面接を行った。質問項目は「高校選択の理由」「共学になった桐生高校の雰囲気」「共学になってから変わったこと」「母校がなくなって思うこと」「群馬県の公立高校の別学について」であった。

倫理的配慮として、個人情報の保護や研究結果の取扱い、調査への協力の自由と同意撤回の自由について説明し、承諾を得た。

### 3 分析方法

分析のための準備として、まず、聞き取り調査から記録を作成した。次に調査者全員ですべての記録を精読し、分析の視点を「生徒は共学化をどう受け止めたか」「共学後の課題」と設定した。別学高校から共学高校への移行に伴う生徒の経験や当時の思い等の特徴をつかんだ。

調査協力者（聞き取り対象者）と聞き取り調査の記録（聞き取り内容）は、表5の通りである。

表5 聞き取り対象者と聞き取り内容

対象者	聞き取り日 依頼方法	性別 高校入学年 入学した高校	質問項目	
			高校選択の理由	共学になった桐生高校
A	2023/4/8 依頼方法①	女性 2019年 桐生女子高校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制服がかわいい。</li> <li>・姉が桐女出身で、高校生活のいろいろな話を聞いていて、良いなあと思った。</li> <li>・女子高だから気楽だし、女子高ならではの盛り上がり等、男子のことは気にしなくて良い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男女別クラスだったから関係なかった。</li> <li>・クラスに男子はいなかったので、校舎内ですれ違ふとちょっと気まずい感じがした。</li> </ul>
B	2023/4/25 依頼方法②	女性 2019年 桐生女子高校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・管弦学部が強くて全国大会に行ったりしていて有名だったので、入りたいなと思って。</li> <li>・桐女の合格レベルより学力的に高かったが、桐高と統合したらレベルが上がると言われていたので目指した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・桐女と桐高の生徒会は、統合する前から連携をとっていて、コロナもあって活動は制限されたものの、お互いの良さを合体させて、新しい学校を作っているという雰囲気があった。</li> </ul>
C	2023/5/12 依頼方法③	男性 2020年 桐生高校理数科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師を目指していて、看護師は女性が多い職場だから、高校も女性がいる環境の方が良いと思い、途中から共学になる桐生高校を選択した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年生から部活に女子のマネージャーが1人入ってきた。肩を冷やす氷を用意してくれたりして、部員は楽になった。</li> </ul>



対象者	聞き取り日 依頼方法	性別 高校入学年 入学した高校	質問項目	
			高校選択の理由	共学になった桐生高校
D	2023/5/18 依頼方法②	女性 2019年 桐生女子高校	<ul style="list-style-type: none"> <li>群馬県はレベルの高い学校が男子校・女子高に分かれていますので、それが決め手。</li> <li>前期試験に落ちたとき、中学の先生から「桐女がっているんじゃない？」と言われた。</li> <li>桐高との統合でレベルもあがるだろうと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>クラスが男子と女子で分かれていたので、クラスの中だと普段どおり、でも廊下に出ると男子がいるな、という感じだった。</li> </ul>
E	2023/5/20 依頼方法③	男性 2020年 桐生高校普通科	<ul style="list-style-type: none"> <li>桐生在住だったので、地元の高校に行けたらと思い選択した。特に男子校だからという理由で選んだわけではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>クラスが男女別々だったので、あまり女子とは接点がなかった。</li> </ul>
F	2023/5/29 依頼方法②	女性 2019年 桐生高校理数科	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校のときから将来は看護系に進むと決めていたので、理数科に行こうと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3年生という受験期のピリピリ感の中で統合したので、理数科の生徒は自分には関係ないと思っている生徒が一定数いたと思う。</li> </ul>
G	2023/7/16 依頼方法①	男性 2019年 桐生高校普通科	<ul style="list-style-type: none"> <li>地元であることと、学力的にも自分が行ける高校だった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>女子との交流があれば楽しかなという期待はあったが、実際にはそれほど交流はなかった。</li> <li>受験生だし勉強に励んでいた感じ。</li> </ul>

\*統合前（2020年度まで）の桐生高校は、普通科が男子校、理数科が男女共学校である。

\*依頼方法①は調査者が担当する授業の受講生等に個別に依頼した。

依頼方法②は調査協力者に同級生を紹介するよう依頼した。

依頼方法③は調査者が授業内に募集しそれに応募した学生に依頼した。

対象者	質問項目		
	共学になってから変わったこと	母校がなくなって思うこと	群馬県の別学について
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>共学化したからといって、そんなに変わった感じはしない。</li> <li>通学が楽になった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>母校がなくなって寂しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>別学でもそれぞれの良さが出てくると思うので、別学でも良いと思う。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>共学だといろいろなことをやるときに盛り上がり方が違うと思う。やっぱり男性がいると違うなあと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>桐女は自然が多くて、良い環境だったので、通う生徒がいないと思うと寂しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>別学と共学を経験してみて、共学の方が良いと思う。</li> <li>男女平等を図る中で、性別役割分業が残ってしまっている点だと考えられるため、積極的に男女共学にすべきだと思う。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>女子と授業のグループワークで一緒になったとき、今まで男子だけの考えだったのが、女子生徒ならではの視点が入ってきて面白かった。</li> <li>ダンス部などの性別でもできるような部活動が増えた。行事もコロナから復活して、男子生徒ノリではないものが増えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>母校がなくなったという感覚はなくて、新しいものが始まったという感覚。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>群馬の進学校はすべて別学になっている。頭のいいこそ共学で学ぶべきではないかと思う。</li> <li>きっと将来世界で活躍する人もいるのに、別学では未来が狭まる気がする。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒会をしていたので、会議を通して、男子と女子だと考え方が違うし、桐高も理数科の女子は違う環境にいると考え方もかなり違い勉強になった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>統合は楽しみだったけれど、いざ空になった教室をみると、寂しいと思った。校舎が使われなくなったので寂しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>群馬県は別学の方が偏差値が高めだし、個人的には同性同士の方が競い合って、学力があがって、環境的に良いのかなと思う。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>女子とかわる機会は行事だけで、男子だけのときは熱量が微妙に異なった。統合前は男子しかいないので、行事とかは全員が本気で熱量があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>桐高が違う桐高になって、寂しさは少しは感じる。でも、自分が最後の代でそれも良いかなと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>群馬県内の別学校についてはどうも思っていない。男子校だから、女子校だから良いも悪いもない。</li> <li>進学校として選んだだけ。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほぼ男子校だった学校が共学になったことがいろいろなところに現れて、校歌ひとつとってもすごく変わったなあという印象がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>理数科女子の制服がなくなったので、寂しかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>男子校の良さを感じたので、別学は別学で良いのではないかと考える。</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>共学化した後でも部活以外では女子との接点はないままだったが、文化祭があり多少接点はあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>名前も場所も変わっていないので特に意識していない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>男女別学校が多いと感じる。</li> <li>男子だけだともっと自分を出せると思う。それで男子校で良かったと思っっている。両方の良さがあると思うが、自分は男子校で良かったと思っっている。</li> </ul>

### Ⅲ 聞き取りの結果と考察

#### 1 聞き取りの結果

##### (1) 高校選択の理由

「なぜ桐生高校（普通科・理数科）、桐生女子高校を選択したのか」という質問に対しては、「桐女（きりじょ）は管弦学部が強くて全国大会に行ったりして有名だったので、入りたいなと思って」（B・女性）、「群馬県はレベルの高い学校が男子校・女子高に分かれているので、それが決め手」（D・女性）、「桐生在住だったので、地元の高校に行けたらと思い選択した。特に男子校だからという理由で選んだわけではない」（E・男性）、「中学校のときから将来は看護系に進むと決めていたので、理数科に行こうと思ったから」（F・女性）、「地元であることと、学力的にも自分が行ける高校だったから」（G・男性）というように、多くが「将来の大学進学を考え、地元の進学校だから」という理由をあげていた。

大学進学と共学化が結びついて高校選択理由となっている例もあった。C（男性）は「看護師を目指していて、看護師は女性が多い職場だから、高校も女性がいる環境の方が良いと思い、途中から共学になる桐生高校を選択した」と、B（女性）とD（女性）は「共学化したら高校の学力のレベルが上がると言われていた」と語り、進学した高校が途中から男女共学化することが直接的または間接的な志望理由となっていた。

一方、A（女性）は「姉が桐女出身で、高校生活のいろいろな話を聞いていて良いなあと思ったから。女子高だから気軽だし、女子高ならではの話の盛り上がり等、男子のことは気にしなくて良いところが良いと思った」と男女別学校であること（姉から聞いた女子高の特徴）を志望理由のひとつにしていた。

##### (2) 共学になった桐生高校の雰囲気

統合・共学化した後も、前年度・前々年度に桐生高校（普通科）・桐生女子高校に入学していた生徒はそのまま男女別のクラスであったため（新入生のみ男女混合クラス）、あまり異性との接点はなかったという。G（男性）は「女子との交流があれば楽

しいかなという期待はあったが、実際にはそれほど交流はなかった」、A（女性）は「クラスに男子はいなかったの、校舎内ですれ違ふとちょっと気まぐずい感じがした」と語った。F（女性）は、「3年生という受験期のピリピリ感の中で統合したので、理数科の生徒は自分には関係ないと思っている生徒が一定数いたと思う」と語っていた。

その一方で、生徒会活動をしていたB（女性）は、「桐女と桐高（きりたか）の生徒会は、統合する前から連携をとっていて、コロナもあって活動は制限されたものの、お互いの良さを合体させて、新しい学校を作っていこうという雰囲気があった」と語り、統合前から生徒会活動をしていた生徒とそうではない生徒との間には、共学化に対する捉え方に大きな隔たりが見受けられた。

##### (3) 共学になってから変わったこと

共学になっても男女が別クラスだったため異性との接点は少なく、「特に変わったことはない」と答える対象者もいたが、異性との唯一の接点として、3名が「体育祭や文化祭等の行事」をあげていた。その中で、B（女性）は「共学だといろいろなことをやる時に盛り上がり方が違うと思う、やっぱり男性がいると違うなあと思った」、E（男性）は「男子だけのときは熱量が微妙に異なった。統合前は男子しかいないので、行事とかは全員が本気で熱量があった」と語り、「女子だけの行事」と「男子だけの行事」と「男女ともにいる行事」との感じ方の違いを指摘していた。

C（男性）は、「ダンス部等での性別でもできるような部活動が増えた」という変化を語りつつ、「行事もコロナから復活して、男子生徒ノリではないものが増えた。学園祭の雰囲気も女子に配慮したようなものになった。女子ウケの良いものになったように思う。男子の中では『やっぱり女子がいた方がよいよね、女子がいてこそ（の高校生活）だよ』という意見が多く、『やっぱり男子だけの方が良かった』みたいな意見は周囲にはなかった」と語っている。

また、学習面に関してC（男性）は、「女子と授

業のグループワークで一緒になったとき、今まで男子だけの考えだったのが、女子生徒ならではの視点が入ってきて面白かった」と語っている。

#### (4) 母校がなくなって思うこと

統合した高校は、統合前からの桐生高校の校地・校舎を利用したため、校舎・校地が使われなくなった桐生女子高校に通学していた生徒は、「桐女は自然が多くて、良い環境だったので、通う生徒がいないと思うと寂しい」(B・女性)、「統合は楽しみだったけれど、いざ空になった教室をみると、寂しいと思った。校舎が使われなくなったので寂しい」(D・女性)と語っている。

一方、統合前の桐生高校に入学していた生徒は、「理数科の制服がなくなった(統合後の桐生高校の女子用制服は桐生女子高校の制服をベースにデザインされた)ので、寂しかった」(F・女性)、「桐高が違う桐高になって、寂しさは少しは感じる。でも、自分が最後の代でそれも良いかなと思う」(E・男性)、「母校がなくなったという感覚はなくて、新しいものが始まったという感覚」(C・男性)、「名前も場所も変わっていないので特に意識していない」(G・男性)と語っている。

やはり、統合後も引き続き校舎・校地が使用されるか等、環境が変わるか否かによって捉え方に違いが窺えた。

#### (5) 群馬県の男女別学校について

最後に群馬県の男女別学校についてどのように感じているかを聞き取り調査した。その中で、「群馬県は別学の方が偏差値が高めだし、個人的には同性同士の方が競い合って、学力があがって、環境的に良いのかなと思う」(D・女性)、「別学でもそれぞれの良さが出てくると思うので、別学でも良いと思う」(A・女性)というように別学校を肯定的に受け止める対象者もいれば、「群馬の進学校はすべて別学になっている。頭の良い人こそ共学で学ぶべきではないかと思う。きっと将来世界で活躍する人もいるのに、別学では未来が狭まる気がする」(C・男性)、「別学と共学を経験してみて、共学の方が良

いと思う。桐女のときは、男性とかかわる機会が電車ぐらいしかなかった。共学だと、いろいろなことをやるときに盛り上がり方が違うと思う。男性がいると違うなあと思った。周りの桐女生で共学に対してマイナスなイメージを持つ人は少ないと感じている」(B・女性)、「男女平等を図る中で、性別役割分業が残ってしまっている点が問題だと考えられるため、積極的に男女共学にすべきだと思う」(B・女性)と別学を否定的に捉えている対象者もいた。また、「群馬県内の別学校についてはどうも思っていない。男子校だから、女子校だから良いも悪いもないし、進学校として選んだだけ」(E・男性)というように、特に別学校を意識していないという意見もあった。

また、G(男性)は、「自分が3年生のときに入学してきた1年生は共学校として入学してきたわけだが、廊下から様子を見てみると『静かだな』と思った。男子だけだともっとうるさいのに。共学だところなるのかなと思った」と語り、「それは共学だとお互いに気にして自分を出さない、遠慮しているように見えるということか」という質問に対して、「自分ならそうするなと思った。男子だけだともっと自分を出せると思う。それで男子校で良かったと思っている。(男女別学校と共学校と)両方の良さがあると思うが、自分は男子校で良かったと思っている」と答えた。

## 2 考 察

質問に対する対象者の語りの中から、「生徒は共学をどう受け止めたか」、「共学後の課題」について考察を加えたい。

### (1) 生徒は共学をどう受け止めたか

対象者から、「女子高だから気軽だし、女子高ならではの話の盛り上がりとか、男子のことは気にしなくて良いところが良いと思った」(A・女性)、「共学化して、行事も男子生徒のノリではない、女子ウケの良いものになった」(C・男性)、「女子と授業のグループワークで一緒になったとき、今まで男子だけの考えだったのが、女子生徒ならではの視点が

入ってきて面白かった」(C・男性)、「男子だけだともっと自分を出せる」(G・男性)というように、ジェンダーの縛りによる語りがみられた。

別学校では「同性だけの気楽さ」があり、異性があると出せない「自分」が出せるという。では、同性だけの「気楽さ」の正体は何か。「同性は気楽」というのは、「男はこういうもの、女はこういうもの」といったジェンダー・バイアスによって構築された空間においてはじめて成り立つことなのではないか(これとは逆に「女性同士だとその関係性は複雑そうだ、面倒くさそうだ」というイメージも同時に存在する)。そもそも、同性だけの集団であろうとなかろうと他者の存在を気にすることが必要な場面もあるだろうし、異性の前でも「自分」を出せる環境を構築することも必要だろう。また、女子(校)ないし男子(校)の文化の中で、「自分」を出せずに窮屈な思いをしている生徒(「男らしさ/女らしさ」から自由でありたい生徒。性的少数者を含む)もいるのではないか。

おそらくこのような語りは、「男女別学校の生徒だったから」特別に語られたものではなく、共学校出身の生徒であっても同じような感覚を持ち合わせているものと思われる。

一方で、C(男性)の語りからは、共学であることによって自分にはなかった〈女子の文化や視点〉に触れたこと、さらには異なる視点が加わったことを「面白かった」と受け止めていることがわかる。これは、男女で異なる文化の中で生きてきた生徒たちが視野を拡げ、ひいてはジェンダー・バイアスから自由になるために、共学であることを役立てうる可能性を示しているように思われる。この点については後述する。

以上のことを踏まえるならば、「女子校が気楽」、「男子校だと自分を出せる」という生徒の感覚を生み出す構造が問題であり、男女ともに同じ環境にいても「自分らしく」いられる環境づくりが求められるのではないか。ジェンダー平等の社会の実現のためには、現在の教育や学校のあり方についてジェンダー平等の視点から構造を考えなおす必要がある。

## (2) 共学後の課題

群馬県では一般的に中学校までは公立の共学校に通う生徒が多いが、そのような教育環境でも、「男らしさ」、「女らしさ」といったジェンダー役割からは自由になっていない。共学化された高校においても同様であり、共学であることはジェンダー平等教育の必要条件であるにしても十分条件ではない。

D(女性)は、「生徒会活動をしている中で、同じ『女子』と言っても、桐生女子高校の女子と桐生高校理数科の女子では考え方が違うことがあり、違う環境にいと女子同士でも考え方も違うのだと勉強になった」と語っている。このように、考え方の違いは単に性別のみを理由としないことに気づいた語りもみられた。

たとえ共学化されたとしても、「男子の役割」ないし「女子の役割」を担ってきた生徒たちが、「男子だから持っている特徴」等の捉え方に留まっているのでは、共学化の意義は薄まってしまう。生徒たちがそのような発想から脱して「〇〇さんだから持っている特徴」と考えられるようなジェンダー平等教育を実現できるかどうか問われており、生徒を性別によって不合理に分け隔てない、性別を理由に生徒の可能性を制限することのない教育が求められているといえるのではないか。

つまり、共学の推進にあたっては、制度上の共学化にとどまってはならず、ジェンダー平等教育という内実が伴う必要がある。例えば名簿の順番、制服や役割分担、進路指導の内容まで、課題は教育実践をめぐる様々な慣行・慣習・通念に関係する。

未だに男女別名簿を使用している学校も群馬県内には存在するが、性別で分けた上、なぜ男子が先で女子が後であるのか、児童・生徒に説明できる教員はいるだろうか。「男女で別れる身体測定等のときに必要だから」というのなら、その必要なときだけ、子どもたちの目に触れない形で男女別名簿を使用すれば問題はないはずだ。

また、学校生活の様々な場面において、教員からの「男子は〇〇して、女子は△△して」といった、男女で役割を分けるような声掛けも存在するのが現状である。

制服についても、男女で別々のデザインを採用している学校がほとんどである。だが最近では、女子の制服がスカートかスラックスかが選択できるようになったり、性的少数者に配慮した「ジェンダーレス制服」という選択肢を用意する学校も出てきた。性別によって異なる服装・見た目を強要することは性的少数者の生きづらさにもつながることが認識されてきた。同様に公立高校の入学願書の性別欄も全国的に撤廃された。このような進展は重要であるものの、児童・生徒をジェンダー・バイアスから自由にする取り組みは、全体としてはまだまだ不十分である。

学校現場における無意識の男女分けは、生徒に「性別は男性・女性にはっきり分けられ、なおかつ「男性と女性は違う」ものだ」という意識を植え付けている。本来、教育の現場で行うべきは、「性別は男女に完全に二分できる」、「男女は役割が違う」という間違った認識を改めることであり、SOGIを含めた多様な性のあり方について議論を深めることである。これまで当たり前とされてきた「男女の制服や役割は違うものだ」というジェンダー規範を再生産させないために、教育が果たすべき役割は大きい。

本研究でも、C（男性）の「男子生徒のノリ」、「女子ウケの良いもの」、「男子だけの考え」、「女子生徒ならではの視点」というジェンダーの縛りによる発言にみられるように「男子と女子は違う」という思い込みが存在した。それらの「男女差」は具体的にどのようなものなのか、もしあるとしたらそれはどこから来たのか等を、共学の学校教育の場で考えさせ話し合わせることによって、生徒が自らの思い込みやジェンダー・バイアスに気づくことができるような取り組みも必要である。そのためにも教員は、ジェンダー・バイアスとは何か、ジェンダー・バイアスから児童・生徒を自由にする意義は何か、そしてジェンダー・バイアスから児童・生徒を自由にするには何をすべきかを、認識していなければならない。

公立高校の制度上の共学化は当然の前提であるが、上記のような児童・生徒が性別にとらわれずに自由

に生きていけるようにするための教育の実質化も、同時に進める必要がある。

## おわりに

本研究では、全国的にも数少ない公立高校の男女別学校が共学化した際に、共学化前から在学していた生徒たちが経験したことや当時の思い等を、分析・検討してきた。

第一に、共学化の受け止め方については、ジェンダーによる縛りの発言がみられたことから、「女子校が気楽」、「男子校だと自分を出せる」という生徒の感覚を生み出す構造の問題を指摘し、現在の教育や学校のあり方についてジェンダー平等の視点から構造を考えなおす必要性を提示した。

第二に、無意識のうちにジェンダーにとらわれた対象者の発言があったことから、そのようなジェンダー規範を再生産させないための教育のあり方について、制度上の共学化は当然の前提であるが、性別にとらわれずに自由に生きていけるようにするための教育の実質化も、同時に進める必要があることを指摘した。

なお、本調査では、対象者が中高校生当時の状況を想起しているため、思い出しバイアスが生じている可能性も否定できない（例えば、「女子高は気楽で良い」と思い入学を志願した」と語っても、それは入学後に「女子高は気楽だ」と感じたのかもしれない）。また、今回の調査結果は、少数の調査協力者から得られたものであるため、さらなるデータの収集・分析が課題である。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

## 注・引用文献

- 1 小山静子「群馬県における男女別学と『男女共学』」小山静子・石岡学編著『男女共学の成立—受容の多様性とジェンダー』六花出版、2021年、44頁。
- 2 この報告は、戦後改革の中で進められ1947年教育基本

法の5条に明記された男女共学について、「この理念は着実に教育関係者等の間に根付き、今日においては、公教育の最も基本的な理念の一つとして、広く国民の間に定着するに至っている」と述べる一方で、群馬県については「戦後半世紀にわたり……別学体制を内包した高校教育が継続された結果、現在、共学化を進めることに対しては……一部に消極的な意見も示されている」と指摘する。そして、公立高校は「男女の別によることなく、生徒が自己の希望に応じて、いずれの高校でも志願することができるという開かれた教育システムを構築することが求められている」と論じ、さらに1994年に県教委が実施した「高校教育のあり方に関する県民意識調査」を参照しながら、「男女共学化は生徒で約7割、その他の対象者で約8割の賛成を得ており、おおむね県民の意向に沿ったものであることが確認される」とも述べて、全校共学化という結論を導き出した。

3 朝日新聞（鹿児島版）2023年7月15日。

4 朝日新聞（福岡版）2022年8月23日。

5 朝日新聞（鹿児島版）2023年6月15日。

6 山形県のウェブサイトに掲載

(<https://www.pref.yamagata.jp/bunkyo/kyoiku/iinkai/kyouikuiinkai/chousatoukei/gakkoumeikan/index.html>, 2023年9月8日最終閲覧)。

7 各校のウェブサイト（そこに掲載されているパンフレット類を含む）による（2023年9月8日最終閲覧）。なお、これらの事実上の別学高校は筆者が把握できたものであり、ほかにも存在する可能性はある。

8 同校のウェブサイト（2023年9月8日最終閲覧）及び学校案内〔2023年度版〕、朝日新聞（熊本版）2011年12月17日による。

9 2023年9月8日最終閲覧。

10 群馬県における新制高校発足時の状況とその後の別学の定着については、小山・前掲が詳しい。小山は、群馬県における「男女別学を当然視する見方の背後には、女というジェンダーにふさわしい、女子のための教育は女子校においてこそ可能であり、大学進学のための教育は旧制中学校を前身とする男子校において可能である、という前提が存在している」と分析している（59頁）。

11 朝日新聞（群馬版）2005年9月4日、2005年11月18日、2008年12月10日。